

主体的に取り組む道德の時間

－「人権教室」の実践から－

Moral Education Which Pupils Tackles Actively

－From Practice of “Human-Rights Education”－

増井 眞樹

Maki Masui

キーワード：児童と合意の上でめあてを決める、自分に向き合った意見が出る発問、

Abstract: I as a commissioner for the Protection of Fundamental Human Rights carries out “Human-Rights Education” in moral classes of an elementary school with DVDs.

A pupil will be defensive inevitably for the class with more than 100 pupils. Then, the requirements for a lesson were arranged and the means put close to the usual lesson as much as possible were devised.

I will become an aid of the custom in which a pupils to look back upon themselves and consider their way of life actively by the class.

Keyword : The question which determines a guide after agreeing with a pupil, the opinion which faced itself comes

1. はじめに

芦屋市のI小学校やS小学校では、児童が主体的に授業に取り組めるように様々な工夫がなされている。

児童が司会をして、授業を進めている。授業開始の挨拶はもちろんのこと、めあての確認も行っている。担任は、児童の考えとすり合わせながら、めあてを板書する。司会者は「めあてを読みます」と合図し、例えば、第3学年の国語の授業「もちもちの木」の場合、本時のめあて「豆太はどんな子どもなのか考える」と全員で声をそろえて読み上げる。更に、「この授業の終わりには、豆太がどんな子どもかわかります」と司会者が続ける。もちろん、学習計画が事前に立てられ、掲示してある。続いて、「先生、お願いします」と授業が進められていく。

担任が発問し児童が挙手すると、司会者が指名する。司会者が指名することから生じる処々の問題はあっても、児童が自分たちで授業を進めているという意識は強く感じられる。「では、ふりかえりを書きましょう」という担任の指示で、児童はふりかえりを書き始め、数人の児童がふりかえりを読み上げる。司会者も必ずふりかえりを発表する。「豆太は怖がりだけれど、本当は優しさも勇気もあることがわかりました」と。全員の児童の学習のまとめが整理できたところを見計らって、「これで、○時間目の国語の授業を終わります」となる。学校全体がこのような授業の形をとっていると、新任者の授業も形は整う。児童の方もこの進め方に慣れている。勿論経験豊かな担任の授業では、児童の考え方を方向付け、自ら学ぶ児童の姿を見ることができる。

そういう学校でさえ、「人権教室」を開催すると、児童は急に受け身になって、指導者の話を聞くばかりになってしまう。ふだんの授業ならよく発表する児童も消極的になる。

「人権教室」とは、法務省から委嘱された人権擁護委員が、人権教育の一環として地域の学校園で開催するものであり、筆者はその役を担っている。これまでに、2校で開催してきたが、児童の主体性を活かしていないことが

課題であった。そこで、授業の要件を検討し、学習指導要領解説「道徳編」に沿って、主体的に取り組める「人権教室」の展開を試みた。

2. これまで実践してきた人権教室

(1) 資料

人権啓発DVD「プレゼント」

監修 全国人権擁護委員連合会事務局 人権擁護委員 川野堂子

【あらすじ】

美由紀は誕生会のできごとをきっかけに綾香にいじわるを始める。恵、茜、さやかたちは、見て見ぬふりをしている。そんな時、美由紀が父親から誕生日にプレゼントされた子犬がいなくなった。綾香は、子犬を探そうかどうか迷うが、これまで仲間はずれにされていた麻里の言葉「いじめをいじめで返してはいけない」に勇気を与えられ、子犬を積極的に探し始める。その行動が周りの友達を変えていく。

【価値について】

価値「思いやり」について、学習指導要領解説「道徳編」の内容項目2-(2)には、「この段階においては、相手の気持ちをより深く理解できるようになるため、温かい心とともに、相手に対する思いやりのこころを育てることが一層重要となる。相手の現在の状況、困っていること、大変な思いをしていることなどを想像することによって相手のことを考え、親切な行為を自ら進んで行うことができるように指導していくことが大切である。」と記されている。

一方、平成25年度 兵庫県人権に関する県民意識調査の「問：子どもに関することで、人権において特に問題があると思うこと（3つまで選ぶ）」から、子どもを取り巻く問題は、「虐待」について「いじめ」やそれを見て見ぬふりをする「傍観者」であることが顕著になっている。（参照 表1）

この調査は、20歳以上の男女を対象に行われたものであるから、大人は、子どもたちの中に「いじめ」が存在し、それを子どもたちの力で阻止することが難しい状況にあると認識している。

いじめは悪いことである。いじめないようにしようということは、子どもの意見として予想されるものである。いじめを受けている子どもの状況を理解し、その気持ちを想像することは、できるのである。しかし、傍観者も悪いという考え方は、十分に理解されているとはいえないのである。それは、いじめは悪いとか許されないということは、学校でも家庭でも言われているが、「見ているだけでも悪い」という「傍観者」については、あまり話題にされていないからだと思われる。

また、「人権尊重の考えについて強く影響を受けたと思うものはどれか。」という問いに対して、家庭や小学校教育に占める割合が大きい結果が出ている。幼稚園・小学校・中学校・高等学校教育を比較すると、小学校教育が最も高い。生き方や考え方を育てるには、小学校から指導していくことの重要性

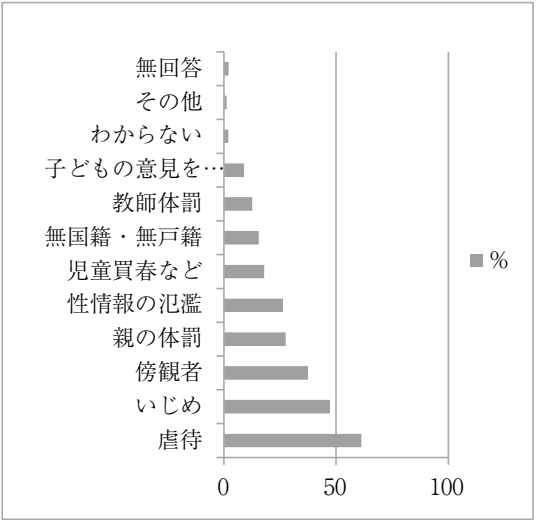


表1 問：子どもに関することで、人権において特に問題があると思うことはどれか。（3つまで選ぶ）
（平成25年度 兵庫県人権に関する県民意識調査）

を確認したことである。(参照 表2)

(2) ねらい

「いじめ」という行為を例に登場人物の気持ちを考えることを通して、他人への思いやりやいたわりの心といった人権尊重意識を養う。

(3) 展開

美由紀のいじわるが始まってから、綾香は落ち込み、やがて不登校になる。その場面までのビデオを鑑賞し、美由紀(いじめている子ども)綾香(いじめられている子ども)恵、茜、さやか、純一たち(まわりで見ている子ども)の気持ちを考え、いじめをなくすためにはどうしたらよいか考える。

(4) 課題

いじめという言葉が先行し、児童たちは構えてしまいがちであった。いじめた子どもに対して、いじめないようにするという意見は出たが、傍観者の問題については出てこなかった。また、それを考えさせる時間と手だてが十分でなかった。

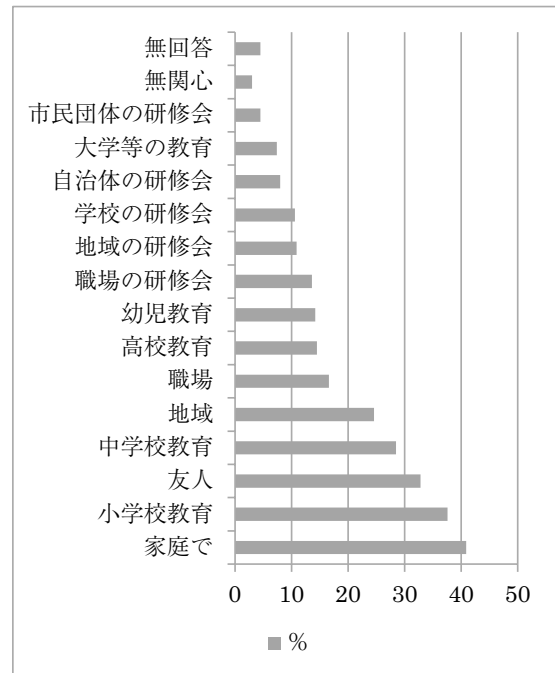


表2 問：人権尊重の考えについて強く影響を受けたと思うものはどれか。(複数回答)

(平成25年度 兵庫県人権に関する県民意識調査)

3. 授業の要件

「人権教室」の意義と資料の妥当性を明確にした上で課題となる授業方法について検討することとした。

まず、授業の要件を整理した。

これは、筆者が初任者指導を行った際に、指導用に活用したものである。

- ① 授業のめあてを明確にする。児童にとって興味関心をもつことができるめあてを設定する。
- ② わかりやすい発問にする。繰り返さない。
- ③ 児童にとって、「聞く」以外の活動の場を設定する。
- ④ 考えるための資料や言葉を用意しておく。
- ⑤ 「ふりかえり」を行い、気づいたこと、理解したこと、考えたことを意識させる。

4. 今回の展開

(1) めあては、児童の日常的課題に合ったもので児童とともに設定する

めあてについては、教科の授業の場合、児童とともに学習計画が立てられ、児童はこの授業では、何をするのか、何を考えるのかの見通しを持って臨んでいる。しかし、「人権教室」の場合は単発であるため、学習計画を立てることができない。そこで、学級の課題として妥当と思われるものを設定した。

また、「いじめ」という言葉は児童にとって重い言葉で抽象的である。この言葉が必要な場面もあるだろうが、指導者の側から、児童の行動を「いじめ」という言葉でひとくくりにするより、生活場面の一つ一つを具体的にイ

メージさせる方がいじめられる側の気持ちや心情がより深く理解できると考えた。そこで、いじめという言葉を安易に出さないようにして、どんな学級にしたいか等問いながら、「学級 みんなが仲良くなるにはどうしたらいいか考えてみよう」と児童の合意を得て、めあてを設定していった。

（２）発問は、めあてにつながる具体的なもので、意見は理由を付して述べさせる

発問については、これまでの「いじめをなくすにはどうすればいいですか」を変え、「仲良くなるためにはどうすればいいか」というめあてを受けて「恵、茜やさやか達（傍観者）がどうすればみんな仲良くなれますか」を主発問とした。ここでは、行為のみを聞くのではなく、判断する心情にも着目させたつもりであったが、実際には行為を問う発問になってしまっていた。

その結果として、児童から出た意見は、以下のように自分のこととして捉えられていないものだった。

- ・美由紀に「いじわるはダメ」と言う。
- ・美由紀はいいかもしれないけれど、いじわるされている綾香はいやな気持ちだから、注意する。

筆者としては、

- ・綾香にいじわるしているわけじゃないから、別に良くも悪くもない。
- ・綾香が恵に「見ているだけでもいじめと同じよ」と言っているのでよくない。
- ・注意したいけれど、注意したら自分がいじめられるから、注意できないと思う。

という意見を出させたいわけだから、「恵や茜やさやかの行動について、どう思いますか」という発問が必要であったのかと反省した。

（３）児童に提示するものは、主発問を受けるもので、考えをより深化させるものを

考えるための資料や言葉では、綾香が恵に言った「見ているだけでも、いじめと同じよ」や麻里が綾香に言った「いじめをいじめで返してはいけない」を取り上げた。いじめられている側の気持ちをイメージさせ、「NO!」と言える勇気について自分の心に向き合わせようとしたが、提示方法が児童には、印象的にならず、上滑りになったようであった。

- ・美由紀に「いじわるはダメ」と言う。

というものに似た意見が多く出たのは、自分の心に向き合わず、他人事として捉えていることの表れではないだろうか。「見ているだけでも、いじめと同じよ」や「いじめをいじめで返してはいけない」を板書で提示したがその場を素通りしたようだ。矢張り、この言葉に立ち止まる工夫が必要である。

（４）課題

めあてを設定するところまでは、スムーズに流れ、児童の発言もあったが、発問「恵、茜やさやか達（傍観者）がどうすればみんな仲良くなれますか」に対する意見は、前述のような意見になった。これは主体的な意見ではない。自分と離れたところで考えた意見である。つまり、児童を自分の心に向き合せることができなかったのである。児童にとって、身近な日常の課題をめあてにすることで、主体的になれると考えたが難しかった。

自分の心に向き合うためには、いじめられた側の状況や気持ちが十分に自分のこととして捉えられなければならない。自分のこととして捉えた結果が「NO!」と言える勇気につながる。その勇気が今の自分にあるのかどうか、わかるけどできない自分を見つめさせる必要がある。今回もこの部分の展開が弱かった。

5. 主体的な話し合い活動をめざして

自分の心に向き合って話し合わないと、主体的な話し合いにならないのではないか。そのためには、具体的にどうすればいいのだろうか。

昨年12月に道德教育の充実に関する懇話会から報告された「今後の道德教育の改善・充実方策について」の中で、「いじめの防止」などの現在の子どもたちや社会で問題となっている事象などが重要な視点として述べられている。また、道德教育の指導方法には、資料1のように述べられている。

つまり、時には、自分の考えを文章にまとめるなどしながら、これまで当たり前としていた考え方を反対の方向から考えてみたり、わかっていることを更に一步踏み込んで考えてみたりする。そして、その自分の考えを書きものにして表現したり、討論したりする。そういう中で、自らの成長を実感させるようにするということだろう。

例えば、善悪の問題も立場によって見方が異なる場合もあることや、自分の思うようにならない複雑で困難な状況に遭遇したときにどのように対応すべきかなどについて、多角的・批判的に考えさせたり、議論・討論させたりする授業を重視することが必要であろう。

特に、現行の学習指導要領では、道德の時間の配慮事項として、新たに「自分の考えを基に、書いたり討論したりするなどの表現する機会を充実し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫すること」とされ、言語活動の充実が重視されている。

資料1 「今後の道德教育の改善・充実方策について」 道德教育の指導方法

「あなたが道德の授業を変える」の中の「いじめ」防止を取り上げた服部は次のように述べている。

- ・「いじめが悪い」だけならば1年生でも知っている。
 - ・「いじめは絶対に許されない」も子どもたちはよく聞かされている。
 - ・いじめられている子どもの辛さやいじめの恐ろしさについてもよく知っている。
- 道德の時間に子どもにとって分かりきったことや日頃から言われていることをねらいにすることにどんな意味があるのか。

更に、服部は、「いじめの現場では、誰も自分がいじめられる側に置かれたくないという恐れから、ついいじめめる側についたり、傍観者になったりしがちだが、たとえいじめている人であっても心からそのことをよいとは思っていない。心のどこかには、後ろめたさや罪悪感があるということに気づかせたい。さらに、いじめられることは誰もが恐れることであるために、一度いじめが始まったら、簡単には止めることができないのだということに気づかせたい。」と続けている。服部の言う児童が話したくなる論点というのは、本文に書いてあることや、わかりきったことではなく、さらに一つ踏み込み深く追究し、時には驚きを感じたり、改めて実感・納得したりすることであるのだろう。多角的・批判的に考えてみることだろう。

服部の考え方に沿って、資料分析（参照 資料2）を行うと、資料「プレゼント」の主人公綾香の状況を想像し、その気持ちを理解することができる。その上で、恵も綾香の状況や気持ちは分かっていることを確認する。そこで、発問：「恵は、美由紀からいじわるをされている綾香を見て、どんなことを考えているでしょう。」

- 美由紀に注意することができない。そんなことをすれば、今度は恵自身が綾香と同じようにされる。だから、仕方ない。

○ 勇気を出して、美由紀に注意しなくてはと思うけれどできない。

発問：「恵はずっと、綾香を助けられなかったのでしょうか。」

続けて、発問：「美由紀の綾香に対するいじわるの気持ちは続きますか。」

○ 麻里と綾香が一生懸命コロ（居なくなった美由紀の犬）を探しているのを見て、これまでのことを反省して、綾香に謝る。

また、「見ているだけでも、いじめと同じよ」ということを、それぞれの登場人物がどのような体験をしてどのように理解していったのか分析し、児童の考え方とすり合わせる必要がある。

6 おわりに

法務省による平成25年の「学校におけるいじめに関する人権侵犯事件に対する申告」を見ると、表3のように年々増加している。

表1～3を見る限り、小学校における「人権教室」開催の必要性和資料「プレゼント」の妥当性は確かである。今冬、再度挑戦する予定である。児童が主体的に取り組めるような手立てが必要である。それが、児童が話し合い

たくなるようなめあての持たせ方であり、主発問である。そして、そのようにして身に付けた主体性が1時間とかある授業に限定されたものでなく、児童の生活全般を貫くものでなければならない。なぜなら、児童の学びは朝目覚めてから夜眠るまで継続されているからである。私たちは常にこのことを意識して、教育活動を展開しなければならない。

そして、この積み重ねによって培われる主体性は、梶田の言う「我的世界」を生きる力につながっていると考えている。

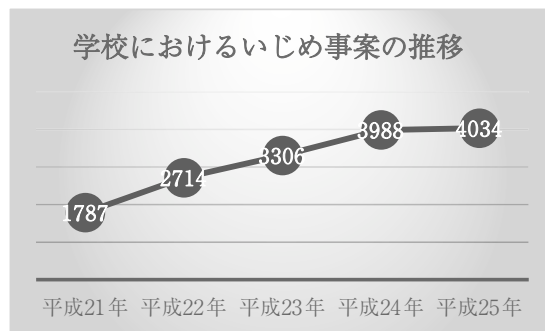


表3 人権侵害に対する法務省の人権擁護機関の取組

引用・参考文献

- ・ 文部科学省（2008・8）小学校学習指導要領解説「道徳編」
- ・ 道徳教育の充実に関する懇談会（2013.12）「今後の道徳教育の改善・充実方策について」
- ・ 服部敬一（2014）「あなたが道徳の授業を変える」学芸みらい社
- ・ 平成25年度兵庫県人権に関する県民意識調査
- ・ 平成25年度人権侵害に対する法務省の人権擁護機関の取組
- ・ 梶田叡一責任編集、人間教育研究協議会編 2014『教育フォーラム52 新しい道徳教育のために』金子書房

場面・出来事	登場人物の心の動き					発問
	美由紀	綾香	麻里	恵	純一たち	
美由紀の誕生会プレゼントの相談						
綾香は手作りのプレゼントを贈る	綾香に腹立てる					
約束を破ったことで美由紀は綾香にいじわるする						
綾香が仲間はずれにされる		さびしくなる		見ていただ けよ		美由紀からいじわるされている綾香を見て、恵はどんなことを考えていたのでしょうか。
綾香が学校を休む		見ているだけ もいじめと 同じよ			綾香のことを ずる休み じゃないかと 噂する	
麻里が綾香の家に行く			綾香を心配			
		麻里の気持ち が分かる				恵はずっと綾香を助けられなかったのでしょうか。
コロがいなくなる	コロなんて また買って もらわ	コロをさがす かどうか迷う	いじめをい じめでかえ すのはい けない	ごめんね	恵にあんな こと言って悪 かった	
	ごめんなさい	コロにかわり はいないのよ				美由紀の綾香へのいじわるはずっと続きますか。
みんなでさがす						何がみんなの気持ちを変えたのでしょうか。
コロが見つかる						みんな仲良くなる

資料2 資料分析